

十二月の新国立劇場中劇場での『焼肉ドラゴン』観劇記

外国語学部英語英文学科 郷ゼミナール

外国語学部 英語英文学科3年 井上満里夏

私たち外国語学部英語英文学科の郷健治先生によるゼミナール（通称「郷ゼミ」）は、イギリスの劇作家ウィリアム・シェイクスピアの劇作品についての考察やディスカッションを行うだけでなく、観劇やゼミ合宿など充実した課外活動によって仲間たちとともに能動的に思考力を培っていく場でもある。

郷ゼミでは、毎年数あるシェイクスピア劇の中から一つの作品を決め、一年間かけて精読や考察を行う。2025年度の私たちの代では、シェイクスピアの四大悲劇作品のうちの一つである『マクベス (Macbeth)』を選んだ。この物語ではかつてスコットランド国王への忠誠心と良心を持ち合わせた主人公のマクベスが、妻であるレディ・マクベスの扇動によって王の座を篡奪し、自らが王になっていった後に暴君へと化していく過程が描かれている。

また、郷ゼミでは週一回のアクティブラーニングとは別に年三回ほど観劇を行う機会がある。私は8月に郷先生が引率するイギリスでの海外文化研修であるSEA2に参加し、ロンドンのテムズ川沿いにある本場グロブ座でシェイクスピアの喜劇『十二夜 (Twelfth Night)』そして、His

Majesty's Theatreのミュージカル『オペラ座の怪人』も観劇した。これらを含めると今年私は五回観劇をしたことになるが、ゼミの課外活動としては三度の観劇の機会があった。一度目は六月に十条の篠原演芸場で鑑賞した日本伝統の大衆演劇、二度目は十一月に明治大学駿河台キャンパスで行われた第22回明治大学シェイクスピアプロジェクトのシェイクスピア劇『冬物語』の観劇である。そして三度目は東京の初台にある新国立劇場の中劇場で上演された『焼肉ドラゴン』(作・演出 鄭義信)の観劇だった。この作品は2008年に新国立劇場小劇場で初演され、その後再三日韓両国で再演されている

ヒット作で、戦後の高度経済成長期の大阪で焼肉屋を営む在日コリアンの家族と彼らの親戚やその友人たちの日常と生活の中に垣間見える苦悩を題



初台の新国立劇場

材にした舞台である。

2025年度の郷ゼミでは、課外学修の一環として三つの舞台を観劇してきたが、私がとりわけ印象的で独創性を感じたのは『焼肉ドラゴン』の舞台である。この劇の特徴は、何といても過去に見てきたシェイクスピア劇のような明白な起承転結は存在せず、役者たちが演じる登場人物たちの日常生活や人間的で繊細な心情によって、彼ら自身へ感情移入していく形式がとられている点である。また、役者たちはシーンによって巧みに韓国語を使いながら芝居をして、そのセリフの日本語訳が左右の字幕に映し出されている点もこれまでに見た演劇との違いを感じ、韓国語を学習したことはない私でも十分に内容を理解することができた。

観劇当日に私は開演時間の十五分ほど前に劇場内に立ち入ったのだが、二階の客席から舞台を見下ろすと、そこには古びた焼き肉屋で浮かれ騒ぐ人々の姿を見ることができた。まだ開演されていないはずであ

るのに、ほのかに香る何かを焼いたようなにおいや役者たちが演じる登場人物の日々の営みによって、物語への没入感はより一層高まるものとなった。この作品の幕の構成は一年間における四季折々のとある日常で隔てられている。はじまりの章では桜の舞う夜に家族たちが宴会を催している、飛行機の轟音が鳴り響き、晴れやかな臨場感や高揚感が入り混じるような場面からスタートする。その一方で中盤では家族の一人息子である時生の自殺や、姉妹間でも一方の人生の羨ましさゆえに関係が亀裂はいるなど、家族間の問題が生じていく。また、家族は在日コリアンであったため、時代の変化によって彼らの慣れ親しんでいた場所は徐々に解体されていき、家族も離れ離れに



新国立劇場中劇場の『焼肉ドラゴン』入場口



劇場内のモニター上の『焼肉ドラゴン』の舞台

一転して驚くほど切ない伏線的な演出になっていたように感じられた。そしてとくに印象的だったのは、家族たちが在日コリアンであることを理由に国の土地を返せと迫られる中で、戦争によって片腕をなくした父親が、「ならばこの腕を返せ、私の息子を返せ！」と反論をするシーンである。国の土地という返却可能なものと、ある人間の生きてきた時間やかけがえのない存在のように、失って二度と返ってくるものがないものの対比がこの作品のテーマのうちの一つなのではないかと感じさせられた。

私はこの作品を観劇したことによって、失った大切なものの不可逆性を感じ、世の中には理屈や制度では解決することのできない問題が存在して

なるストーリーが展開される。序章からちょうど1年が経過したラストシーンでは同じ桜と飛行機の轟音の演出がなされていたはずであったのに、かけがえのない家族やゆかりのある家や仲間の解体というストーリー展開の中では、



『焼肉ドラゴン』を観劇した郷ゼミ3年生

いることに気付かされる大きなきっかけになったと考えている。新国立劇場で上演された『焼肉ドラゴン』は、ゼミで学んでいるシエイクスピアの著した数々の劇作品とは時代設定も国もはるかに異なる作品であった。その一方で日本の歴史の延長線上にあるという観点から、私たちの身近に存在する現実を客観視するとともに、理屈では形容できないすべての人間が持つ生き様を感じることができ、生きることは何かをより深く考えさせられる機会となった。